

■ 修士論文要旨

国際経営における日系多国籍企業の意義

—海外子会社の新たな可能性—

A significance of Japanese multinational corporation in international management

— New possibility of foreign subsidiary company —

神奈川大学大学院 経営学研究科

国際経営専攻 博士前期課程

江 原 泰 成

EHARA, Taisei

① 研究目的

本論では、日系多国籍企業に多くの注目を当て、特に企業の円滑な事業の遂行に欠かせないものである子会社について多く触れていく。多国籍企業に関連することなので、ここで取りあげる子会社とは、海外に居を設けているものを対象にしていくことになる。そこで、海外子会社のまだ探知されぬ機能性を見ていく。これにより、海外子会社の新たな可能性を確認することにつながり、海外子会社の活用における役割の重さを知ることにつながっていく。旧態依然の海外子会社に対するイメージを拭い、それと同時に国際経営の新たなあり方を本論で細かく提唱していくことを、最も訴えていくことが目的である。

② 論文の内容

まず、海外子会社の現状の活用法を見ていくものになっている。それは日系多国籍企業が中心となる。活用法を見ていく中で、他国との比較、問題点など狭義の枠で絞るものというよりは、考える状況を複数述べていくものとなっている。また、その中で今後の改善として考えられる戦略のいくつかも、本論の中で交えている。それにより、

今後の海外子会社の在り方を読者が、イメージしやすい作品に仕上がっているものとなっている。

戦略的要素に触れると書いたが、組織的なアプローチもところどころ加えている。これには理由があり、どうしても海外子会社の自律的活動だけで事業を全うできるケースは多くないので、そこでどうしても本国にある親会社の存在を見ていく必要になる。そのなかで、本国親会社と海外に拠点を持つ子会社との関係性を、本論では各章に渡り多角的な始点から検討をしている。そのなかで、自律性という言葉を多用しているが、海外子会社の独断で事業を遂行するときと、親会社も交えた相互の意思伝達を用いるべきときと、さまざまなケースがあり、状況に応じた相互の関連性を触れている作品になっている。

経営資源に関しても、本論では多角的な視点から検討している。特に資源の種類にこだわらず、有形資産、無形資産の活用法に深く言及している。研究開発の面で特に重要性の高さを指摘している。実際に、製品開発や他企業との協調、また海外子会社同士の製造においても、研究開発能力を駆使しなければいけない。そこで、海外子会社の存在が研究開発の面でそのような機能を発揮するのか、

また、今後の海外子会社は研究開発においてどのようなスタンスを取るべきなのかを、データを当用しながら検証していくものになっている。

国際経験にも深く言及しており、海外子会社が現地でいろいろな試練に直面していく中で、それを乗り越えたとき子会社内のレベルアップにつながるについて述べている。これは、長年海外というサバイバル名要素の強い舞台で事業を行うことの重要性に触れたものとなっている。それと同時に、撤退に迫られて時の子会社の行動についても言及しており、さまざまな選択があるなかでいかに子会社自身がどのような行動に取るべきなのかを、著者なりの視点から検討していく点もあり、必ずしも海外子会社は現地で成功を収めるために尽力をするべきであるといった、一辺倒な思考を押し付けるものにはしていない。常に、柔軟性を海外子会社側が持つべきであると提唱し、本国親会社の従属的な意思決定の一方通行を、できるだけせずに海外子会社自身がその場その場の状況に応じて、柔軟に対応をしていくことが重要である、そのようなものを強く提唱するものに本論はしてある。

本論では現地でのプレゼンスを高めていくうえで、海外子会社自身の能力の高さは絶対に必要であると述べている。それは能力の高いことにより、その現地での注目を浴びようになるからである。それにより自社製品の高い市場の獲得につながり、企業が現地でプレゼンスを高めていくことの重要性を改めて認識できる。本論では、その現地でのたかい雄売れ全素の獲得に向けた戦略も述べている。特に先進国向けだけではなく、インフラストラクチャーの未完な点が多い、後進国や途上国においての戦略にも言及している。これにより、海外子会社の可能性をより幅広く見ていくことができるようになっている。実際に事業の海外展開は先進国一辺倒ではない。特にこれからの時代は現在、後進国の位置づけになっている地域はとても大事である。BRICsやネクストイレブンなど、人口の多い地域での成功が多くの市場を獲得することにつながる。そのような、現状だけでなくこれ

からの潮流にも合わせた、海外子会社の展開も見ていくことで、より未来の海外子会社の在り方にもイメージを注入しやすい作品になっている。

海外子会社の在り方という点から、必ずしも良い点だけを捉えるのではなく、負の面も捉えることで、国際経営という環境下の怖さを本論では捉えている。それにより、海外子会社の正面を創出する手法についても、妥当性の高いものを述べている。つまりは、改善点を明らかにすることで、よりリアリティーを本論の中で追求していくことにした。海外子会社の持ちうる能力と、そこから読み取れる将来性の高さを日系多国籍企業の国際的なプレゼンスのアップに向けて、どれだけの可能性があるかを見ていく。つまり、それが結論で触れる、海外子会社の影響力のところでふんだんに述べている。

本論の構成としては、海外子会社を初めの段階で読み手にどのようなものなのかを、できるだけわかりやすく伝えていき、その後に日系多国籍企業における海外子会社の可能性を見ていく。戦略的なところから分析することが多く、日系企業の国際的な関連性をより強固なものにしていくための手段として、投資、研究開発、提携などさまざまな点から見ている。そのなかで、グローバルビジネスが当たり前になった昨今の潮流に上手く適合していくための手法を述べるだけでなく、実際の1つ1つの考えにおいて妥当性があるのかまで検証している。日系企業の国際的な展開における、さまざまな視点で見ていくことにより、今後の可能性について深く、そして強く訴えているものになっている。